福　　祉

1　福祉科における授業改善等の成果と課題

福祉科では、現行の学習指導要領において、生徒が様々な変化に積極的に向き合い他者と協働して問題を解決していくことが求められている。今の生徒たちが成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化することが推測される。また、急激な少子高齢化が進む中で、生徒一人一人が福祉の学びを生かして持続可能な社会の担い手として、社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。こうした要求に応えるべく、北海道における福祉科教育の成果と課題は、以下のとおりと考えられる。

成果	課題
【外部連携】教科等横断的な学びの展開を提案し、地域資源や企業との連携事例を共有し関係機関とのネットワーク構築を支援した。	【連携の持続性】企業等との連携を一時的なイベントで終わらせず、持続可能な活動として定着・発展させる仕組みの構築が必要である。
【探究学習】課題を発見し、解決に向け主体的に取り組む「探究的な学び」の重要性について教員間の共通理解を図ることができた。	【指導法の確立】生徒が主体的な探究学習へつなげていくための具体的な指導方法や、実践事例の提示が求められている。
【ICT の活用】ICT 機器等の効果的な活用により、言語化が難しい専門技術の「可視化」や「当事者体験」の幅が広がり、主体的・能動的な学びに対する教員の認識が深まった。	【先進技術の活用と共有】介護ロボット、生成 AI 及び ICT 機器等を活用した指導法を確立する必要がある。また、それらの先進的取組事例を周知する機会を確保する必要がある。
【観点別評価】学習指導要領が求める評価の観点とその趣旨についての理解を深め、各校の特性に応じた評価規準の作成を推進した。これにより、生徒の学習状況を客観的かつ適切に評価するための視点が共有された。	【プロセス評価・指導と評価の一体化】生徒の学習のプロセスについて、評価方法の工夫・改善が求められている。また、評価を学習支援や指導改善に生かす実践の充実が必要である。
【職業観・勤労観の育成】現場を意識した実践的な授業の重要性を共有し、技術習得にとどまらず、他者への思いやりや専門職としての自覚、豊かな「職業観・勤労観」を育む指導方針の確立を図った。	【社会の変化への対応】近年、介護人材の需要が増加し、更に福祉ニーズは多様化・複雑化している。こうした状況に対応するために、現場実習等の体験的な学習を充実させるなど、福祉教育の改善を進める必要がある。

2　学習指導及び学習評価の改善・充実

教科「福祉」の目標においては、地域福祉の推進と持続可能な福祉社会の発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成することが求められている。その際、以下の実践的・体験的な学習活動を行うなどを通して、目標の達成を目指すことが重要である。

- 仮説に基づく調査・研究や実習等を通じ、自己の学びや変容を自覚し、キャリア形成を見据えて学ぶ意欲を高める活動
- 福祉関係者や当事者との対話、生徒同士の討論等を通じ、自らの考えを広げ深める活動
- 「福祉の見方・考え方」を働かせ、知識・技術や事例等について、科学的根拠に基づいて福祉の具体的な課題に取り組む活動

3　指導と評価の計画例

(1) 社会福祉基礎の計画例

これまでに整理した成果と課題を踏まえ、学習指導要領が示す「資質・能力の３つの

柱」と「評価の観点」を明確に対応させるため、ルーブリックの活用やプロセスを可視化するポートフォリオを導入した指導事例を以下のとおり示す。

ア　単元〈社会福祉思想の流れと福祉社会への展望、地域福祉の進展〉の目標

①社会福祉思想の歴史的変遷と関連性、地域福祉の意義を理解するとともに、関連する知識・技術を身に付ける。

②社会福祉思想の歴史的変遷、地域福祉の課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ、科学的な根拠に基づいて創造的な解決する力を養う。

③諸外国や日本の社会福祉思想や歴史的経緯を踏まえ、地域共生社会の実現に向けて自ら学び、主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。

イ　単元の評価規準

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
社会福祉思想の歴史的変遷と関連性、地域福祉について理解しているとともに、関連する知識・技術を身に付けている。	社会福祉思想の歴史的変遷や地域福祉の課題を発見し、科学的根拠に基づいて創造的に解決している。	社会福祉思想や歴史的経緯を踏まえ、地域共生社会を目指して自ら学び主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

ウ　単元の指導と評価の計画（10 時間）

次 【時間】	学びの過程	ねらい、学習活動等	重点	記録	備考 ※「おおむね満足できる」状況（B）
1～3 外国における社会福祉 【3時間】	習得	ねらい：諸外国の社会福祉思想、各国の現状や課題、福祉のグローバル化について課題を多角的に考察し、表現できるようにする。 学習活動：各国と日本を比較し多角的に考察する。また、グローバル化の課題に対し、人材を送り出す国と受入国双方の視点で解決策を考察し、論述やプレゼンテーションで表現する。	思	○	諸外国の課題、福祉のグローバル化について多角的に考察し、人材を送り出す国・受入国双方の視点を踏まえて考えを論理的におおむね表現できている。
			ICT 端末を活用して、諸外国の事例や思想について調べ、分かったことを表現する活動を、効果的に行わせる。		
4～6 日本における社会福祉 【3時間】	活用	ねらい：日本の社会福祉思想の発展、社会福祉制度について理解を深める。 学習活動：国家扶助・救貧から個人の尊厳や自立支援、地域共生へと発展してきた過程を諸外国と比較しながら理解する。また、社会保障制度の基礎知識を調べ、ワークシートにまとめて知識の定着を図る。	知	○	日本の社会福祉の発展、我が国の福祉関連法の成り立ちについておおむね理解し、正しい知識を身に付けている。
			教科『公民』との教科横断的な視点を取り入れ、日本の社会保障制度の基礎的理解を促す。		
7～10 地域福祉の進展 【4時間】	探究	ねらい：地域共生社会の実現、災害に備えたまちづくり等について自分ごととして捉え、課題発見とその解決策を考察し、表現する。 学習活動：地域共生社会の実現や地域福祉について情報収集して分析する。地域課題を自分の課題として捉え、課題発見とその解決策について、ワークシートを活用し、グループセッションや地域への発信等を通じて探究的な学びを深める。	思・主	○	**【思考・判断・表現】** 地域課題を分析し、関係機関への取材を通じて解決策を思考・判断し住民へのポスター作成やグループセッション等で論理的に表現できる。 **【主体的に学習に取り組む態度】** 地域課題に関心を持ち、ヒアリングや関係機関への対話を行い、地域共生社会の実現に向けた解決策を協働して意欲的に探究しようとしている。

エ　学習指導案（８時間目／10時間中）

・単元：社会福祉思想の流れと福祉社会への展望、地域福祉の進展

１　本時の目標：地域共生社会の実現のために地域課題を自分の問題として考え、必要な取組を判断して表現することができる。【評価の観点】「思考・判断・表現」

２　本時の展開

過程	学習内容	指導上の留意点	備考（評価基準・評価方法）
導入	【前時振り返り】地域福祉の歴史、地域共生社会の理念についての復習 【家庭学習の確認】身近な大人や高齢者への聞き取りの実施状況の確認	・前時の学びを振り返るとともに、家庭学習の取組状況を確認する	・本時のワークシート
展開	【個別課題】聞き取りと自身の地域課題を整理し「自分たちの街・通学する地域」の課題を分析する 【グループワーク】班で自ら発見した課題や家庭学習（家族・高齢者への聞き取り）の結果を共有 【考察】「地域課題」の解決に必要な要素を考える。専門職（社協・民生委員・行政等）の役割や地域住民及び高校生の役割をグループで話し合う	・ルーブリックとポートフォリオ機能のある「探究ワークシート」を活用して、生徒が評価基準を把握して取り組めるようにする ・多様な意見に触れさせることや、想像力を働かせながら理解させるようにする ・解決策を話し合う際に生成AIを活用し、グループの考えを深めさせる	【評価方法：ポートフォリオ評価、自己評価】評価基準を明記したワークシートを活用し、単元の学習プロセスを可視化・蓄積して「思考・判断・表現」を評価する 【評価Ａ】地域課題の解決策を専門職や自身の役割を踏まえて適切に判断し、具体的に表現している 【評価Ｂ】地域課題を適切に捉え、その解決に必要な取組について表現している 【評価Ｃ】地域課題の理解が不十分で、その解決策を表現することができていない
	生成AIから多角的な情報を引き出すことで、グループの議論を活性化させ、多様な角度から解決策を検討させる。		
まとめ	【次回予告】外部講師による講義と解決策に対する助言により、解決策を更に深める。また、ポスター作成とグループセッションについて説明	・外部講師：自治体職員等に依頼 ・ポスターは地域の方に見てもらう（市役所、駅、病院、図書館、社協事務所等に掲示を依頼）	

オ　学習の進め方や学習評価の工夫

(ｱ) 探究的な展開と地域課題を自分自身の課題として考察する

地域課題を生徒の「身近な問題」として捉えさせ、グループで共有・分析することで「地域の共通課題」へと視野を広げて考察を深める学習プロセスを目指す。 また、「専門職の役割」と「高校生・地域住民の役割」を考察し、地域共生社会の実現に向けた解決策を思考・判断させることをねらいとしている。

(ｲ) 学習の蓄積（ポートフォリオ）と評価基準（ルーブリック）の活用

ワークシートでは、生徒が「目指すべき到達目標や評価基準」を意識して学習を進めることができる。また、単元のプロセスを一つのシート上に可視化することで、自らの学びを振り返り、主体的に指導改善・自己評価へ繋げる仕組みを提案している。

(ｳ) 評価Ｃの生徒に対する具体的な手立てについて

地域の課題の解決策を考えさせる際、他地域の取組事例など、分かりやすい具体例を提示する。また、学習方法を具体的に提示し（資料の提供、生成AIの活用等）、スモールステップを踏んで段階的に自らの考えを深められるように支援する。

【実践事例】

「福祉×観光（ホテル）」の産学連携授業として、ホテルの従業員に対する技術講習会を行い、これまで福祉科で学んできた知識と技術を、想像力を働かせながら発揮することで、企業が抱える課題の解決を目指した実践事例を紹介する。

福祉のテーマ：「持続可能な福祉社会の創造」
「福祉の力で様々な課題を乗り越える！すべての人が安心と安全、自分らしい生活を！子どもから高齢者までみんなが人生の主人公に！」
観光のテーマ：「わが子も私も今日は主人公」
企業課題：建物が古く、バリアフリー化されていないため、お客様によっては移動や利用が難しい施設・設備がある。また、それらのお客様に対する支援について、従業員の知識･技術が不十分であり､全てのお客様に安心で安全なサービスが提供できていない。

◆科目「介護総合演習」における２単位時間（50 分×２時間）の指導と評価の計画

1　本時の目標

(1) 課題解決の方法を、これまでの福祉科で学んできた知識・技術を基に考え、相手に伝えることができる。［評価の観点］思考・判断・表現

(2) 福祉に関わる専門職の視点から、企業・地域の課題解決に主体的かつ協働的に取り組むことができる。［評価の観点］主体的に学習に取り組む態度

2　本時の展開（２単位時間　移動時間は含まない）

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準
20 分	（導入） ・目的の再確認 ・企業からの説明 →自己紹介・課題の共有 ・生徒からの説明 →自己紹介・講習会について ・グループ編成  **モニターに投影して全体共有**	・企業の課題を福祉の力で解決することを再度認識させる。 ・生徒とホテル従業員の混成グループ編成を事前に設定する。 **※ホテルで介護技術を活用できる場面を考えさせる。お客様への具体的な声かけなどを意識させながら行う。**	【主体的態度】 福祉に関わる専門職の視点から、企業・地域の課題解決に向けて主体的かつ協働的に取り組んでいる。
60 分	（展開） ・グループごとの実技講習会 ①階段での車椅子介助講習 ②スロープでの車椅子介助講習 ③特殊車両乗車介助講習  	・事前アンケートから、生徒に講習の内容を決めさせておく。 ・介護のポイントや、介護に対する自分の思いを伝えさせる。 ・車椅子を押す側と乗る側の、双方を体験してもらう。 ・講師として、ホテル従業員をフォローすることを意識させる。	【思考・判断・表現】 これまで福祉科で学んできた知識・技術を基に課題解決方法を考え、相手に伝えようとしている。

	 ※１講習 20 分とし、①～③すべて体験してもらう。	 段差が上がれない場合、生徒がフォローに入る。どのようにフォローするかは生徒に考えさせる。また、原因の説明と対処法のアドバイスも考えさせる。	
20 分	（まとめ） ・講習会のまとめ（グループワーク） →生徒が講師として感じたこと →ホテル従業員が講習会に参加して感じたこと  ・アンケート ・講習会の終了	・生徒が伝えたかったことや、受講した従業員の方の感じたことなどを、グループとして発表させる。 ・講習参加者へのアンケートを実施する。QR コードを読み取り、スマートフォン等から回答してもらう。 	【思考・判断・表現】 自らの取組を振り返り、論理的に改善方法を伝えようとしている。 また、他者との対話を通して、自らの考えを深めようとしている。

※事前学習・事後学習について

事前学習	企業理解（企業概要等を他学年と協働的に学習） →他学年との学習（他学年との協働・教え合い） 関連する学習（外国人従業員への対応、アンケート調査の方法、地域の歴史や風土、北海道の観光産業、保育に関して） →教科横断的な学び（英語科、情報科、地理歴史科、公民科、家庭科） →実践的コミュニケーション力、他者理解
事後学習	報告・振り返り →他学年への報告を通して得られた学びを再確認 →教科横断的な学び（他教科と福祉科の学びの関連付け） →福祉の学びの深化（活用方法の検証、実践的な知識・技術、福祉の力を活用した問題解決力）

４　主体的・対話的で深い学びの実現に向けたチェックリスト「福祉編」

本チェックリストは、福祉科の各科目において、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行う際に、教師が取り組むべき具体的な方策を示したものである。実践事例で紹介した科目「介護総合演習」では、福祉に関する他の科目で学んだ知識と技術を統合するなどの実践的・体験的な学習活動を行い、課題解決に必要な資質・能力を育成することが求められている。単元の指導計画等を作成する際などに、本チェックリストを活用して指導や評価の実践について見直しを行っていただきたい。

	学習者	授業者
主体的な学び	□ 知識及び技術を獲得することに向けた粘り強い取組を行っている □ 学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整している □ キャリア形成を見据えて学ぶ意欲を高めている □ 自らの学習活動を振り返り、変容を自覚している	□ 生徒が明らかにしたくなる学習課題を設定している □ 既習事項の活用方法を考えさせる工夫をしている □ 本時の目標を生徒自らつかめるようにしている □ 実践的・体験的な学習活動（実習等）を取り入れている
対話的な学び	□ 生徒同士で科学的な根拠に基づく議論・対話を行っている □ 地域住民や専門職など社会の多様な他者と対話している □ ICT や人工知能（AI）等を活用し、多角的な意見に触れている □ 先哲の考え方を手がかりに考えている	□ 板書や発問で教師が学生の学びを引き出し、思考を交流させている □ 社会資源を活用した実践的な対話場面を用意している □ 地域や福祉施設、産業界等との連携・交流を計画している □ 交流を通じて思考を広げる
深い学び	□ 福祉の特質に応じた「見方・考え方」を働かせている □ 習得した関係する知識と技術が統合されている □ 新たな社会福祉の創造や発展に向けて活用しようとしている □ 問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを表現したりしている	□ 育成を目指す資質・能力を焦点化している □ 単元や各時間の計画を立て、達成状況を評価する □ 教材の価値を把握し、ねらいを具現化する